

キャスト

桜田 一 臣……………佐 藤 慶
 桜田 節 子……………小 山 明 子
 ■
 桜田 し づ……………乙 羽 信 子
 ■
 桜田 満 洲 男……………河 原 崎 建 三
 桜田 律 子……………賀 来 敦 子
 立 花 輝 道……………中 村 敦 夫
 桜田 忠……………土 屋 清
 (新人)
 長 老……………殿 山 泰 司
 桜田 勇……………小 松 方 正
 桜田 守……………戸 浦 六 宏
 桜田 進……………渡 辺 文 雄
 ■
 桜田 富 子……………河 原 崎 し づ 江
 勇 の 花 嫁……………原 知 佐 子
 桜田 キ ク……………高 山 真 樹
 桜田 ち よ……………三 戸 部 ス エ
 ■
 立 花 武 世……………小 沢 栄 太 郎



スタッフ

監督……………大島 渚
 制作……………葛井欣士郎／山口卓治
 脚本……………田村 孟／佐々木 守／大島 渚
 撮影監督……………成島東一郎
 美術……………戸田重昌
 音楽……………武満 徹
 録音……………西崎英雄
 編集……………浦岡敬一
 照明……………山下礼二郎
 ヘアー・デザイン } ……宇野久夫
 メイクアップ } ……ムラハシ英子



大島 渚 監督作品

儀式

〈カラー・スコープ〉

●大島 渚

おのれが生きていかなければならないこの時代への熱い想いと、おのれがいかなる人間であるかという苦い問いが、かろうじて私に映画をつくらせつけてきたと言えるだろう。そう、そのような何かがなくては、映画にとつてあまりにも困難なこの時代に、映画をつくりつづけることなどほできないのだ。

十年、私はおのれと時代とのかかわりのなかで、その時その時、おのれの関心が最も突出した部分を鍵に映画をつくりつづけてきた。殊に、近年ATGとの提携による作品が多くなってからは一層その特徴が顕著であつたように思う。そのような私の映画のあり方は、私の映画の芸術的な方法であると共に、私の映画の経済的基盤を克服するための方法でもあつたのである。即ち低予算!

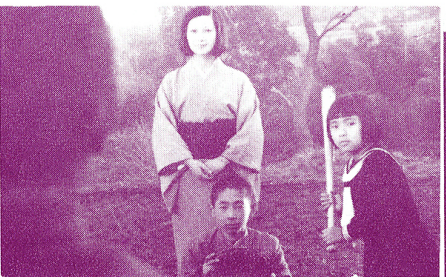
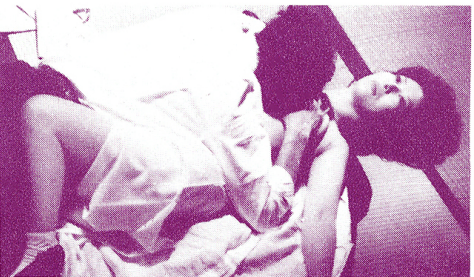
今回、ささやかに近來の予算よりは多少上廻る資金を得て、私が、一九七一年における私の最も突出した関心を鍵にすると同時に、十年、いや戦後二十五年抱きつづけた関心をも満足させうる作品を構想したのも、したがってまた当然である。たとえば前作「東京戦争戦後秘話」が、映画をつくる人間としての私というふうな私を限定して七〇年における死の問題を追求したのに対して、「儀式」は、戦後二十五年の私のトータルな生、トータルな情念を、七一年の現在において検証しようとするものなのである。

しかし、それは単に予算の増減のみによるものではない。六八年、六九年の学園闘争と七〇年におけるその一応の終末を経て今、日本社会は、戦後日本の歴史の総括を迫られていると私は考えるのである。「儀式」はささやかではあるが、それに対する私なりの、そして極めて私的な答えである。

それが何ゆえに、「儀式」を通じて行われるのか。儀式の時に、日本人の心は微妙に揺れ動くというか、日常的な心の動きとは全く違った動きをするというか、ともあれその時、日本人の心の特性があらわになると考えるからである。そのような日本人の心が私には怖い。そのように揺れ動く私自身の心の動きが怖い。日常的には、論理的にも感覚的にも極めて簡単に否定できる軍国主義や排外的愛国心が、一旦非日常の場に立った瞬間に怖しく易々と日本人の心を占拠してしまうのではないだろうかという不安を、私は否定し切ることができないのである。

かつて酒場で長部日出雄が口ぐせにしていた「不振の前半生」という言葉が、近來より痛切な響きをもって私の胸によみがえる。戦後二十五年、事はことごとく志に反したが如く思える。だからといって私は志を変えようとは思わず、戦いをやめようとは思わない。「儀式」は、そのような意味で他の私のすべての映画と同じく、同じ思いを持ちつつ倒れた死者への鎮魂歌であり、生者への進軍ラップである。多くの人が、満洲男の生への、そして輝道や律子や忠の生と死、或いは一臣や節子の生と死、更にはしづや勇や進や守の生にさえも深い同一感を抱いてくださらんことを。

儀式



●かいせつ

大島渚監督作品「儀式」は本年で創立十周年を迎えるATGが、それを記念して独立プロの雄創造社と提携して製作したもの。

この作品は、昭和八年満洲事変の余波さめやらぬ頃満洲で生まれ、戦後母親と共に命からがら引き揚げてきた桜田満洲男を主人公に、彼がその半生のなかで出会う桜田家の数々の冠婚葬祭の場面が中心となつてドラマが構成されている。

その桜田家の冠婚葬祭に集まる複雑な血縁関係者が織りなす人間模様と、この一族を包んで流れていった歳月のなかに混沌と動乱に満ちた昭和の時代と日本人の心情をさぐるうとする雄大な構想と野心に満ちた問題作である。

撮影は一ヶ月余にわたる大映京都撮影所でのセット撮影と羽田空港、鹿児島市及び奄美群島の加計呂麻島でのロケ撮影で完了した。

脚本は田村孟、佐々木守と大島監督との共同脚本。

撮影監督は名手成島東一郎で、重々しいものなかに陰惨なものを出し、花々しい一種のやわらかさを出したい」と凝りに凝り見事な成果を取めている。

美術は戸田重昌で、由緒ある旧家の雰囲気を出すために、一千万円もするという仏壇から掛け軸、ザブトンに至るまで小道具はすべて本物を使用しており、大映京都の一番大きいA2ステージ(四〇〇坪)一杯に組まれた「桜田家」のセットの大きさ、豪華さ、重厚さは最近の映画では驚異的ともいえるものである。

音楽は武満徹、録音は西崎英雄、編集は浦岡敬一、照明は大映の山下礼二郎など最高のスタッフである。

出演は主役の満洲男に河原崎建三、輝道に俳優座のホープ中村敦夫、そして二人の恋人律子に元俳優座の賀来(かく)敦子と、大島監督が「自分自身の情念の歴史をたくしたい」と厳選した自慢の若手キャストで、ことに賀来敦子は「白昼の通り魔」以来ずっと出演を懇望し続けて来た女優で、今回、奇跡的にカムバックすることになったもの。

そして、佐藤慶、小山明子、小松方正、渡辺文雄、戸浦六宏ら大島組のメンバーに加えて、小沢栄太郎、乙羽信子、殿山泰司、原知佐子、河原崎しづ江、三戸部スエ、高山真樹、無名の新人として起用された土屋清など、演技派、個性派、がずらりと顔を揃え、このドラマを盛り上げている。